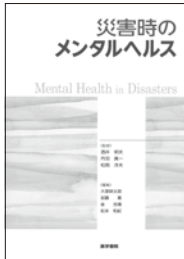


## ■ 書 評



## 災害時のメンタルヘルス

酒井明夫, 丹羽真一, 松岡洋夫 監  
大塚耕太郎, 加藤 寛,  
金 吉晴, 松本和紀 編  
医学書院  
2016年3月 268頁  
本体価格 3,200円+税

震災で亡くなられた方々のご冥福をあらためてお祈りいたします。

本書は、わが国における大規模災害時のメンタルヘルスのための網羅的な実践書である。構成は、第1章 災害とメンタルヘルス、第2章 直後・急性期における支援の実際、第3章 直後・急性期：外部からの支援、第4章 直後・急性期：被災地域内の状況と支援、第5章 介入方法、第6章 特別な支援対象、第7章 中・長期の支援：総論、第8章 災害における研究、第9章 実践編である。全体で約80項目あるが、うち第9章が34項目、全体の3割近いページ数を占めている。災害時のこころのケアに関する情報は、インターネットを通じて、国立精神・神経医療研究センターの災害時こころの情報支援センターや本学会を含む複数の学会のホームページからダウンロードできるが、このようにまとまって1冊手元にあると、実際に災害対応にかかわる際に有用であろう。

以前、本欄で、「災害精神医学」(フレデリック・J・スタッガード Jr., アナンド・パーンディヤ, クレイグ・L・カッツ編著, 富田博秋, 高橋祥友, 丹羽真一監訳, 星和書店 2015年1月発行)を、災害時精神医学に関する包括的なテキスト、根拠に基づいた災害支援を行うための実践的なガイドブックとして紹介した。それと比べ本書に特徴的なのは、第9章の実践編であり、主に東日本大震災での事例を中心に、医師・保健師・自治体・大

学精神科・精神科病院などさまざまな立場や地域から、アルコールや子どものこころのケアなど多領域にわたり紹介していることであろう。第9章の各項目は、「発災まで(あるいは、支援開始まで)」「発災時の状況(支援現場の状況と特徴)」「支援状況(発災後の困難と対処)」「課題と教訓」などを中心に詳しくまとめられており、読みやすい構成になっている。第9章に対して、理論編ともいえる第1～8章も、わが国の事例を踏まえての記述が多い。わが国で被災者の心理的支援が注目されるようになったのは阪神淡路大震災以降であり、読者の多くは、当時の自らの経験と照らし合わせながら実感を伴って読むことになるであろう。

2016年は、東日本大震災後5年目という節目であり、今後中長期支援のあり方がますます問われることになる。本書では、中長期支援については第7章の総論のみに見えるが、各論に関しては多くの章で触れられている。わが国は災害の多い国であり、地震災害だけでなく、自然災害としては津波・台風・水害・噴火・竜巻など、人為災害としては放射線災害・集団食中毒・輸送事故(船舶・鉄道・飛行機)・無差別殺傷事件など多岐にわたるが、第7章では、わが国に多い風水害についての記載もある。東日本大震災のような未曾有の大規模複合災害にあつては、中長期支援に関しても大きな困難を伴うことが容易に想像される。本書全体を通して、地域の特性とそれに伴う支援のあり方、困難さ、課題について多岐にわたる経験を知ることが、今後の災害支援の実践や備えを考えるにあたり大変役に立つであろう。

2016年4月に起きた熊本地震では、東日本大震災を契機に体制整備された全国からの災害派遣精神医療チーム(DPAT)が活動した。本書の執筆者の中には、DPATの体制整備や熊本地震支援にかかわった方も多い。今後のわが国の災害時の精神医学的支援が、有効に機能していくことを期待する。

(高橋秀俊)